

大聖院：消えずの火（きえずのひ）

弥山（みせん）の消えずの火は、806年に真言宗の開祖である弘法大師・空海（774–835）が、真言宗の中核である護摩行のために焚いた火が、絶え間なく山頂で燃え続けているものと伝えられています。大聖院の僧たちは、不消霊火堂（きえずのれいかどう）で空海の火を昼夜を問わず見守っています。仏像の横に置かれた長いろうそくに消えずの火が灯され、お堂の中央に置かれた炉に火を入れるのにも使われます。炉の上には大きな鉄釜がかけられ、中のお湯は霊水と言われています。長年に渡り、弥山の消えずの火はその火が絶えないように数か所に分けられてきました。その火の1つが、1964年8月1日に広島平和記念公園の平和の灯の種火に使われました。この平和の灯は、すべての核兵器が廃棄され、核戦争の脅威がなくなるまで燃やされ続けます。